

第10章

日本の開発学はどうなりうるか ——中国人元留学生のオートエスノグラフィから覗くその未来——

汪 牧耘

I. はじめに：日本の開発学を練り直す

開発学 (development studies) とは、開発をめぐる諸国の経験を学問的に価値づける試み全般だといえる。その議論は戦後イギリスやアメリカの主導で体系化されてきたが、近年では非欧米諸国による「脱欧米中心」¹の動きが多く見受けられるようになってきた (Chi and Van Orden 2023; Kim et al. 2023)。中国のように、欧米と一線を画した独自の開発学を掲げる国も現れている (Cheng and Liu 2021; 汪 2023b)。

日本においても、自国の開発経験を知財化しようとする様々な動きが現在進行中である。本特集号も、国内外におけるそれぞれの場面で語られた日本の開発経験とその独自の価値を「日本の開発学」として捉え直そうとする試みである。「東アジアの奇跡」や「世界初の最大非西洋ドナー」などと呼ばれてきた日本は、欧米を相対化するための開発学を形作る場として期待されている。

しかし、そもそも「日本の開発学」とはなんだろうか。これに関する確立した定義はないものの、「日本の開発学」という用語が用いられる際に想定されているのは、ほとんどの場合、「日本人による開発を日本人が研究する」ことであった。前章でも指摘されているように、国際社会における地政学的な変動に伴い、開発学は日本の開発経験を価値付けるだけにとどまらず、知日派・親日派リーダーを創出するためのツールとしても用いられるようになってきている (大山 第9章)。知識生産が国家の競争の道具と化す中、「日本の開発学を発信する日本人」と「日本の開発学を受信する外国人」という構

図がますます強固になっていくと考えられる。

こうした開発学の動きに置き去りにされているのは、日本人ではない発信者の存在であろう。本章の筆者である私も、その中の一人である。中国出身の私は、2014年に来日し、日本語学校、法政大学大学院の修士課程、東京大学大学院の博士課程を経て、現在は東京大学東洋文化研究所の特任研究員を務めている。開発をめぐる知的基盤の形成に関心があり、博士論文では「中国の開発学」の系譜をひもとき、それを育む土壌における欧米や日本の影響とその今日的課題を浮き彫りにした（汪2022）。また、その延長線上で日本の開発学についても執筆や講演を行ってきた（汪2023c；2023a；2021b）。

そのような活動をしてきた私は、「日本人」が主語となる日本の開発学にとってどのような存在なのだろうか。今日の日本の開発学の動向、さらにいえば開発経験を国家間の争いに応じて「国籍化」しようとする取り組みに対して抱いた違和感が、本章の出発点となっている。

開発経験において国柄や独自性を訴えることは日本特有の動きではない。その限界と懸念もすでに示されている。2010年代以降の中国における開発学ブームにみられるように、国際的な競争力・発言力を高め、自己正当化しようとする欲求は、ナショナリズムに最も回収されやすい自国最上の知識生産に陥る。それに基づく「脱欧米中心」の試みは陳腐な批判になりかねない²。日本が中国や欧米を仮想敵としながら、自らの開発経験を集権的に価値付けようとする動きもまた、自らの開発学を議論の隘路に追い込むのであろう。

転換期に向かう日本の開発学の新しい局面を切り開くためには、従来の研究で捨象・匿名化・背景化されてきた対象への着目が重要となる。その試みとして本章は、知識生産の主役であるものの、これまでほとんど研究対象とされてこなかった研究者自身に目を向ける³。具体的には、私自身を事例に取り上げる。日本の開発学に対する私の認識が時と共に変化してきた実態を描き、「日本」という括りが持ちうる価値の可変性を明らかにする。それを踏まえて、多角的な探究を許容する場としての日本の開発学の可能性を試論する。

II. オートエスノグラフィ：「異」を価値づけるための方法論

本章は、私の経験という個人の領域を学術的に検討するため、多様な分野で使われ変容してきたオートエスノグラフィ (autoethnography, 以下, AE) という方法論を用いる。

AE とは、調査者が自分自身を研究する手法である (藤田・北村編 2013)。その端緒は、1970 年代から始まった実証主義的な科学論への抵抗に遡ることができる。1980 年代以降、他者をめぐる記述する側・される側の非対称性と、その背後にあるオリエンタリズムや植民地主義的な構造への批判が高まっている⁴。それにしたがって、記述者として自分自身を再帰的に顧み、さらに研究に含める重要性が顕在化した (Adams et al. 2015)。2000 年代以降、AE の試みはいくつかの代表作⁵とともに方法論として確立されてきた。

現在、AE は社会学、経営学、移民研究、対人援助研究やコミュニケーション学などといった多くの分野で活かされている (土元・サトウ 2022)。応用される文脈は多様であるものの、AE を行う目的は、自分の経験・感覚を対象化することを通して、十分に研究されていない社会的・文化的な経験に「異を唱えるためのテキストのスペースを作り出す」ことだといえる (Adams et al. 2015 : 41)。さらにいえば、AE は個人の経験を公的な現実の一部として捉え直し、それを通して主流派に排除された異なる認識と批判の視点を獲得する上で有効である (Falola 2022 : 33)。膨大で複雑な問題を貫き、さらに新鮮な示唆と社会的変革を促す手法としても、AE は期待されている (Stahlke Wall 2016 ; 川口 2022)。

AE の執筆にあたって重要なのは、個人に関する文学的な記述と、それが持つより広い文化的・学問的位置付けとの間でバランスを取ることである (Stahlke Wall 2016)。ただし、その記述の対象は、既存の見解だけではなく、記述していく過程における自己開示に伴う「感じ揺れる自己そのもの」や「自己の変革」をも含む (川口 2019 : 155)。言い換えれば、AE は、執筆における自らの変化を受け止めながら、個人の特異性とそれを越えた何らかの社会的な共通性を描き出す営みである。

このような変動の過程を分析対象とする場合、何に注目するかが重要となる。前述したように、私の事例は「日本の開発学を発信する外国人」、すなわち「日本の開発学を発信する日本人」と「日本の開発学を受信する外国

人」という二項対立的な想定からこぼれおちた「第三項」であり、一定の特異性を持つ。本章は、こうした特異性を形作った自らの経験を読み返すことで、日本の開発学が抱えている現状・課題とそれを捉える新しい視点を洗い出すことを試みる。具体的には、「国」と「学問」という二つの着眼点を中心に、自らの営みを再帰的に分析する。

本章では、私のこれまでの日記、インタビューの書き起こし、寄稿、論文、発表資料などを手がかりとし、それらを時系列的・再帰的に振り返りながら、関連のエピファニー⁶を抽出する。ⅢからⅥでは、中国で生まれ育った私が留学生として来日し、国際開発というテーマに出会い、そして日本の開発学を発信する中国人という「第三項」となった経歴から、その時々のお会いや感情に突き動かされている私の知識生産の様相を浮き彫りにする。Ⅶでは、このような私の経歴から浮かび上がる日本の開発学の価値を示し、そのありうる未来を論じる。

Ⅲ. 「開発」に出会うまで

1. 「漢方」から「観光開発」への方向転換

私は、中国西南部の貴州で生まれた。貴州は中国有数のカルスト地帯であり、近年では雲霧が立ちこめる美しい自然環境、涼しい気候、多彩な少数民族文化の存在などが注目される人気の観光地となっている。しかし、その地で生まれ育った私にとってより馴染みが深いのは、「天に三日の晴無し、地に三尺の平無し、人に三両の銀無し」というフレーズに代表されるような、貴州の自然環境とそこに暮らす人々の貧しさを嘲笑する眼差しであった。

怠け者は貴州に残り、勤勉な人は外に出る。そう思い込まされた私は、いみじくも Eribon が言うように、故郷との距離で自分の力を測っていた (Eribon 2013)。教育資源の乏しい貴州から離れ、私は中国東部にある江蘇省の大学に入学した。当時の私にとって、国際開発に関わるような経済学や政治学などの分野は堅苦しすぎて興味が持てず、社会学や人類学に至っては聞いたことすらなかった。大学では、貴州で少数民族の医学や動植物に触れ合う機会が多くあった影響もあり、漢方薬を学ぶ学部を選んだ。伝統医学の理論、薬草の性質や用法の勉強に専念した時間は充実していたが、学部のカリキュラムは、薬草の有効成分を化学実験で抽出し分析することを中心として

いた。漢方医学の背景にある自然観・人間観を無視した漢方薬の研究を、当時の私は退屈としか思わなかった。

大学4年生になっても、あまり就職する気になれない私に、留学という考えが芽生えていた。同級生の中ではイギリスやアメリカを目指す人が多かったが、私は高額な留学費用に戸惑った。また、漢方を学ぶなら、欧米よりも、同じく漢方を使い、かつ「伝統重視」のイメージが強い日本の方が適切な選択にも思えた。ちょうどその時期に、知人が日本に留学して、とても良かったということを耳にした。私も日本留学に漠然とした期待を抱いて、2014年4月に東京のある日本語学校に入った。

当時は、中国人向けの情報ネットワークや進学塾が今ほど発達していなかったため、日本語学校で「あいうえお」を学びながら進学の準備をすることは簡単ではなかった。日本の漢方薬専門の研究科を探してはいたが、そのほとんどは薬学部にある。私の期待とは裏腹に、日本でも生薬・化学成分の漢方研究が主流であった。それを悟って以来、中国と同じような漢方薬の学び方への強烈な抵抗感が私を逆の方向に押し出した。自分の関心は、漢方の思想的価値の背景にもある文化と人間そのものにあると気づき、文化人類学関連の本を拙い日本語で読み始めた。

日本語学校のビザの有効期限は2年である。周りの人がどんどん入れ替わっていることや、名門大学に入ってほしいという家族の期待をプレッシャーに感じながら日々を過ごした。ビザが切れるまでに日本の大学に合格できなければ、中国に帰るしかないのに、不合格の通知が次々と届いていた。結局、他の学生にはない自分の強みは辺境の貴州で生まれ育ったことであるということだけだと突き付けられた私は、故郷の文化や少数民族について調べ始めた。そこで、貴州の石門坎^{セキモンカン}という地域の波瀾万丈な歴史に出会ったのである。

石門坎は、20世紀初めにキリスト教の宣教師の訪問をきっかけに、大きな教育成果を取めた歴史で有名になった少数民族地域である。1930年代から、一連の災害や社会的動乱が石門坎を深刻な貧困状態に追い込み、これは2000年代以降でも続いている。2017年、貴州省政府の貧困撲滅政策の一環として、石門坎は行政主導の観光開発の中心地になった。一方、貴州にとっての石門坎は、政府によるキリスト教への批判や警戒の歴史を抱えている、ある意味触れられたくない場所でもある。

「こうした地域での開発がいかなるものであり、それが少数民族の文化や生活にどのような影響を与えているか」。この問題関心をもとに、私は石門坎における開発と文化の関係性をひもとくような研究計画で出願し、ついに日本の大学院に合格することができた⁷。そこで私を拾ってくれた指導教員は、石門坎の研究を行っていた法政大学大学院国際文化研究科の民族学者である。

2. 国際開発という世界との出会い

指導教員の専門と研究テーマに関連性があったことで、私は日中間の言語と情報の壁に振り回されながらも、無事に理系から人文社会系の修士課程に進学することができた。しかし、進学当時の私にとって、日本に留学する意味ははっきりとしておらず、国際開発もどこか遠いもののように感じていた。

このような私が国際開発と接点を持つようになったきっかけは、同研究科のM先生との出会いであった。私の修論が中国農村部の開発に関わっているということで、東南アジアの農村をフィールドとしながら国際開発に携わってきたM先生に論文の副査を担当してもらった。

M先生は研究者として新しい知見を与えてくれるだけでなく、教育者として学生にも常に献身的に向き合ってくれる人であった。理系出身の私は、心理学、哲学、歴史学などといった様々な専門の研究者が所属する国際文化研究科で多分野から刺激をもらうことができた一方、その分自分の研究テーマを特定の学術的概念・理論に絞るまでには時間かかった。修論に取り組む中では、研究計画の軌道修正、ストーリー化の試行錯誤と執筆の往復運動は不可欠である。その過程において、M先生の手取り足取りの指導が救いとなった。「『スタッフ、職員、職人、官員、役人』をどう使い分けるか」というような指摘を受けるたびに、自らの記述や考えの一貫性の無さを思い知った。頭を掻きむしりながら日本語で執筆・推敲し、言語の違いによる論理構成の違いを学ぶプロセスを通して、自らの思考が細部まで磨かれていくように感じた。

修士1年目の秋学期から、私はM先生の「国際協力を捉える視点」という学部のゼミにオブザーバーとして参加することになった。移民・難民、途上国の教育、環境問題、SDGsなどといったいわゆる国際開発の課題を、文

献だけでなく東南アジアの現場で触れる機会にも恵まれた。ゼミに入ったばかりの私にとって、国際開発はあくまでもM先生から学ぶための接点、そして自らの考えを鍛える手段にすぎなかった。しかし、M先生の鋭い質問と奥深い視点に感銘を受けているうちに、つい国際開発の議論に吸い寄せられた。理念と実践の相反、意図と結果の乖離、そして目的と手段の倒置が満ち溢れる国際開発の世界は、自らの頭と心を鍛える魅力的な場だと思うようになった。

この国際開発の世界で絶大な存在感を示しているのが、中国である。中国政府の「一带一路」をはじめとする対外政策と、それに対する毀誉褒貶が日々ニュースになっている中、中国人である私とその影響を受け止めざるを得ないような場面に直面するようになった。中でも2017年の夏に、ゼミの活動で東南アジアの現場を訪れた際に、「資源を攫取する中国人」と見なされて敬遠されたり、逆に「絶大な経済成長を遂げた中国人」として羨望されたりした経験は今でも鮮明に覚えている。国際社会にほとんど関心を持っていなかった私は、否応無く世界における母国の立ち位置に目を向け始めた。中国の国際開発をどう理解すればいいか。修士入学時には想像もしなかった問題関心が、私の中で浮かび上がってきた。

IV. 中国の開発学への探究

1. 博士課程進学：開発をめぐる知的基盤を問う

2018年4月、私は法政大学大学院修士課程を修了し、東京大学大学院新領域創成科学研究科・国際協力学専攻の博士課程に進学した。国際協力学専攻は、学部を持っておらず、決まったディシプリンもない、いわば学際的な場である。それがゆえに、学生に対しても特定の学問分野における蓄積を求めておらず、理系から国際開発へと専攻を二転三転してきた私を受け入れてくれる寛容さがあった。指導教員のS先生はM先生の元指導教員でもあり、開発を、人間の思考を豊かにする糧として、多角的に論じてきた日本人研究者である。

博士1年目の私は、研究者の間で議論を起こし続けている「新興ドナーと伝統ドナーのせめぎ合い」に主眼を置き、中国と世界銀行の国際開発をめぐる理念的な対立を実証する研究案を立てていた。そこで見つけた事例は、貴

州における世界銀行の観光開発の融資事業である。中国が、西洋との開発観の食い違いが多く指摘されているにもかかわらず、世界銀行の援助を受け入れ続けてきたのはなぜか。この疑問をもとに私は2018年の夏に現地調査を行った。そこで明らかになった中国と西洋の観念的対立が現場レベルの交渉を通して解体されてきた過程は大きな学びとなり、相違を過大評価することによって見過ごされた大切な現実を私に教えてくれた⁸。

他方、中国と西洋が同じだとももちろん言えない。ならば、中国の開発とは一体何だろうか。そもそも、中国語の「開発」は何を意味しているのか。文献を調べて唖然としたのは、既存研究では中国の開発事業の意図や影響には多く着目されているものの、中国の開発概念を歴史的に解明するものがなかったことである。開発を語る上で、核心的な言葉を棚上げした宙吊りの独自論やそれに基づく対立論に強い違和感を覚え、私は中国語の「開発」概念の研究に踏み出した。

当時所属していた国際協力学専攻には、工学や経済学の先生が多く、「開発をどう改善するか」を実証的に捉えようとする研究者がほとんどであった。彼らからすると、概念研究の有用性は理解しにくい。中には私の研究に興味を持ってくれる開発研究者もいたが、その研究手法はフィールドワークが中心であり、概念研究に関する方法論的なアドバイスはなかった。自分のやり方に確信を持てなかった私は、中国関係の学会で出会った言語学者や思想史研究者に指導を求め、その温かい支えをもとに研究を進めた。

「開発」概念の研究は私の関心を深める大きな一歩となった⁹。まず、開発をめぐる日中の知的つながりを自ら掘り出した際の新鮮な驚きがある。漢字と言え、中国から日本へ伝わったものだというイメージが強いが、実は現代中国語で使われる「開発（カイファ开发）」という言葉は、日本語に由来しており、20世紀初頭に中国の知識人や日本の漢学者によって中国に輸入された言葉である。「すでに十分備わっている価値の開花」という漢字の「開発」が本来持っていた仏教的意味を発見したことも驚きであった。こうした「開発」に本来あった意味が「人為的な価値の創造」に移り変わった過程には、近代化を加速させようとするような時代の烙印が深く刻まれている。英語の development の歴史からは見えてこないこの含意は、私が「開発」という概念に惹きつけられた原点である。博士論文で、「開発学」という定義が曖昧な学問分野をあえて取り扱ったのも、この「開発」概念の研究が与えてくれた

足場があったからである。

2. 「中国の開発学」を語りはじめる

「開発学」は最初から私の博士課程における研究の主題ではなかったが、私の研究関心がそれに収斂したきっかけは、博士2年目に降ってきた指導教員のS先生の誘いであった。“Development Studies in Asia”という小さな国際会議がタイのバンコクで開かれるので、「中国における開発学の現状と課題」について発表をしないか、と声をかけてもらったのである。「開発」概念の研究の面白さを味わったばかりの私にとって、「アジアの開発学」はさらに新鮮な構想に見えた。ぜひ参加してみたいと思い、中国の開発学について急いで調べ始めた。

発表準備の最中、偶然にも日本のある学会で中国の「開発学の父」と呼ばれているL先生に会う機会があった。当時、中国の開発学に携わり始めたばかりだった私は、学会が終わると急いで彼を追いかけた。自己紹介したところ、「国際開発を学ぶなら、欧米に行くよね。何で日本？」とL先生に問われた。当時の私は彼の反応に違和感を覚えたものの、それを言葉にして説明することはできなかった。その時の自分にとって、開発学とは取り組んでいる研究の中の一つに過ぎず、それを日本でやる意味を深く考えていなかったからだ。

しかし、“Development Studies in Asia”に参加した経験は私に大きな変化をもたらした。学会では、日本や韓国からの研究者、そして中国人の私が自国の開発学に関する調査結果を共有した。私の報告自体は付け焼き刃ではあったが、アジアの開発学を語るためには、日本が必要だ、そして私にも責任があると考えerようになった。「日本が必要だ」というのは、日本と現地の人的つながりがなければ、こうした議論はそもそも成し得ないからだ。S先生と私以外にその場に集まったのは、日本と何らかのつながりをもつ東南アジアの研究者や活動家がほとんどであった。「私の責任」というのは、私が無気なく言ったことが「中国の声」として捉えられる可能性があるためである。その場において、政治的・経済的に絶大な存在感を示している中国に関する唯一の語り手が、中国の開発学について2ヶ月間調査しただけの私しかいなかった。

学会が終わった後、日本・韓国・中国の開発学の比較研究をしようと、S

先生、韓国出身のK先生、そして私でチームを組んだ。その中で、私の博論の内容も「中国の開発学」に寄せ始めた。博士1年目から、私は中国の貴州省、雲南省、そして東南アジアのラオスなど中国国内外の現場で、あまりにも多様に展開し、しかも常に変化している中国の国際開発を観てきた。こうした中国の開発を簡単に説明できるわけがない。それにもかかわらず、中国政府の宣伝する「貢献」と海外メディアが主張する「破壊」という批判がわかりやすく対峙しており、それらのイメージが現実よりも先行している状況がある。当時の私は、単純なイメージを解体し様々な喧伝に捨象されがちな中国の普通の顔を描き出したいと思った。そのため、個別の開発事業よりも、国際開発をめぐる思考の軌跡全般を捉えたくなり、そこで中国の開発学が魅力的な研究対象に見えた。

V. 「日本の開発学」という新しい研究対象の出現

1. 「内なる他者」による抵抗

中国の開発学に本格に取り組み始めてから、L先生に問われた質問—「国際開発を学ぶなら、欧米に行くよね。何で日本？」—をよく思い出すようになった。当時の私が答えられなかったのも当然であった。前述のように、私は、L先生に出会うまで、日本という場で学ぶことの学術的な位置付けを国際開発に特化して考えたことはなかった。その質問を受けてはじめて、私は日本で国際開発を学ぶ意味は必ずしも定かではないことに気付いた。それ以降、「今の自分ならどう答えるか」と考え続けていた。

開発学を日本で研究する意味を考える延長線上で、私は日本の開発援助やそれをめぐる知識生産に興味を持ち始めた。2020年11月から日本国際開発学会(JASID)の「ODAの歴史と未来」研究部会に入って、学びを深めようとした。20名程度のメンバーのなかには、指導教員のS先生に加え、タイで知り合ったK先生もいた。ここでは、日本のODAを振り返りながらもそこから得られる知見が日本最良にならないように、多角的な議論が行われた。

ちょうどその時、私はある有名な中国人研究者の論文を読んだ。その論文は、日本の援助経験が国際社会で傍流扱いされている原因を分析したものである。その中で、日本政府と学術界は欧米の規範に身を寄せてしまい、自ら

の開発経験を独自のものとして守り抜かず、さらに自らの知識体系を打ち出す気力に欠けると批判されていた。しかし、その論文の参考文献には、日本語のものが一編もなかったのである。

日本語で発信された開発研究を読まずに、日本の知識生産にケチを付ける中国人研究者に対して、最初はただ不快に感じていたが、その後に抱いたのは不安であった。日本の開発経験を誠実に整理しようとしている JASID の努力を見てきた私のような「内なる他者」が何とかしないと、こうした「外なる他者」の声ばかりが中国で広がるのではないか。ならば、粗いものでもいいから、すぐに応答しないとイケない。そこで私は慌てて、日本国内で日本の国際開発がどのように論じられているのかを整理しながら、その知識生産の特性を中国語の論文でまとめた¹⁰。

その過程において、私には日本と中国の開発学の似通った点が多く見えてきた。なかでも、日中が抱えている葛藤には類似性がある。日本人も中国人も、自らの開発知識は欧米がやってきたような脱文脈の「形式知」ではなく、現地に柔軟に対応する「実践知」だと主張している。他方で、自分の弱みはやはり「知識が体系化されていないこと」や「概念化する力の弱さ」にあると同様に反省している。結局、日中とも、欧米中心の開発学に違和感を覚えながら、その概念・理論・方法を使うことになっている。こうした類似性を持つ日本の開発学は、西洋と異なる独自性の創出にこだわり苦しんでいる中国にとって重要な参照軸であると思うようになった。

2. 日本を語る立場・距離感の変化

日中の開発学を論じる中で、私は欧米の開発学を「理念型・強権側」と単純化している日中の研究者を批判してはいるが、欧米の内的多様性について深くは踏み込まなかった。これに関して、イギリスで博士号をとった K 先生から多くの指摘を受けた。アジア人が欧米の開発学の中身を理解しなければ、欧米の学問を存続させたクリティカルな思考力を矮小化したり、また逆にその理論や体系の発展に圧倒されたりしてしまう。それだと、アジアの本当の良さが出せないだけでなく、欧米と議論しないとイケないことも見落されるのだと K 先生は言う。

K 先生の指摘を受けて、私は中国、日本、欧米の開発学を語る際の自らの立場の違いに気付くようになった。私が、中国の開発学を書こうとしたの

は、世界に影響を与えている母国の開発を多角的に理解し発信することに、一人の中国人として責任を覚えた側面があった。他方で、日本の開発学について書く場合は、日本の外にいる人による、私が経験した日本の開発学の実態と乖離した恣意的な批判への危機感や抵抗感が動機となった。その上で、私にとって欧米の開発学は、開発知識の権威的な生産者や中国の批判対象として、論じなければならない存在ではあるものの、私の生き方の外部にある存在であった。そのためだろうか、日本や中国の開発学を熱く論じる一方で、欧米の開発学についてはその外輪を描くところで留まっていた。

また、異なる言語との距離感も違っていた。母語の外に出た状況一般は、「エクソファニー」と呼ばれるが、同じ「外国語」であっても、異なる言語を使う際の心境には違いがある（多和田 2012:6）。振り返ってみると、私が中国語で読む・論文を書く時には、母国を知らなければ・母国に知らせなければならないというような義務感があった一方、英語論文を執筆する際には、より高い評価と広い読者を獲得するような目的論が色濃かった。それに比べて、日本語で書く時は、長年日本語で学び、啓発され激励された自分が日本社会へ還元するという側面がある。学術成果を発信する上で決して有利ではない日本語をあえて選ぶことには一種の権威からの解放も感じている。

そして2022年の春、私は博士号を取り、東京大学で特任研究員として働くようになった。それ以降、日本で研究する価値を掘り下げようとするモチベーションが高まっているようにも感じる。日本は、私が中国の開発学を知るための学問的な参照軸だけではなく、研究者という職で人生を営む居場所になったからだ。何より、自分が母国で暮らす両親に親孝行できていない後ろめたさを抱えながら、家族に「博士号をとってもまだ帰れない理由」を説明しなければならないことが影響している。日本だからできる研究があることや、日本語だから伝わる知性があることを言語化し、その価値を説明することが、それ以前とは異なる意味でも必要となったのである。

こうした気持ちが芽生えた一方で、日本に根を張る身として外部からの批判に危機感や抵抗感を覚えたものの、私自身も日本の開発学が持つ学術的意味を掴みきれていなかった。もちろん、日本の開発学を組み立てるための資源はたくさんある。日本の国際開発に関わる研究者や実務家の優れた人間性、宝の山のような歴史資料、そして外国人を温かく受け入れてくれる JASID という場は、いずれも私にとって代え難い貴重な存在である。しか

し、日本の開発経験とその価値をめぐる議論は各分野に点在しており、「思想が対決と蓄積の上に歴史的に構造化されない」という丸山眞男の批判に当てはまるような性格を未だに持っている（丸山1961：6）。

そう考えると、前述した中国人研究者の批判は的外れともいえないだろう。ならば、日本の開発学とは結局何なのだろうか。中国出身者と日本居住者という自分の立場を相対化しながら、より大きな世界に向かって開発学を思考することは、いかにして可能だろうか。

VI. 良き「第三項」になるための模索

1. (元) 留学生企画に見えた出口：類似点・相違点を越えた先

特任研究員になった2022年から、私は明確な目的のない試みを始め、自らの悩みを解き放とうとした。その一つは、「なぜ日本で国際開発を学ぶのか」という企画である。

企画を思いついたのは、2019年に前述したL先生の質問を受けた後である（汪2019b）。この企画に本格的に取り組むようになったきっかけの一つは、在留資格を「留学」から「高度専門職」へと変更する手続きであった。

手続きにおいて、自分の「高度さ」を一々点数付けて見せることの気持ち悪さ、そして東京大学の就労証明書を鞆から出すまでに浴びた職員からの不信の眼差しは忘れられない。私が日本で何を経験し、この国のことをどう思っているのかは、入国管理の政策の目的から見るとほとんど関係ない。その時の私は、労働価値のみが測られている自分に切なさを覚えた。

別の角度から考えれば、日本を都合よく利用して使い捨てるような外国人も少なからずいるのだから、日本政府が外国人をランク付けして、それに基づいて包摂したり排除したりするのも、ある意味では理解できる。しかし、いつも怒りの感情を原動力にしている自分のことを何となくわかっているからだろうか、私は自分の頭をあえて冷やさなかった。

日本に留学している人、留学していた人は、行政統計上の数字や異文化理解の研究対象ではなく、知識外交を媒介するための存在でもない。一人ひとりが不確定性を生き抜いた個人である。このような気持ちを抱えながら、2023年1月、私は上述の企画をJASID・人材育成委員会の支えのもとに立ち上げた。2月から、私は運営チームとともにJASIDの会員の中で12人の

(元) 留学生の協力を得て彼らのライフヒストリーを聞かせてもらった。

結果を端的にいうと、今までの協力者の中には、誰一人として日本で国際開発を学ぶことを日本に来る段階から計画していた人はいなかった。一連の「偶然」の結果として、国際開発を学ぶことになった過程も十人十色である。日本で国際開発を学ぶ際、他人との出会いは非常に大きな影響要因となっている。修士・博士課程の場合、このような属人的な側面はさらに強く見受けられる。なかでも、どの指導教員のもとで学ぶかによって、学ぶ環境、調査の地域、業界との連携、開発の考え方、そして研究の質を測る基準が大きく異なっている。

国際開発の学び方に関して、ほとんどのインタビュー協力者は、学校で「体系的な訓練を受けたことがない」という。こうした人材育成の「非体系的」は、研究における方向感覚を失い研究を進める上で必要以上の迷走をもたらす時もある。規範化されていないがゆえにより開放的なテーマ設定と自己探究を促す時もある。留学生は、来日の偶然性、研究関心の属人的な定め方、そして体系化されていない人材育成という三つの側面が相互作用しながら編み出している空間の中で、日本で国際開発を学ぶ意味を感じ取ったり、または感じ取った意味を捉え直したりしているといえる。

このような聞き取りの中で、私は自分の体験とは、必ずしも自分だけのものではないことを改めて実感した。そこには、個人の悩みから他人との連帯を通して自由になれる「解放感」もあれば、逆に自分だけの独自の経験だと自負していたことが実はそれほど特殊でもないと思い知った時の「がっかり感」もある。幸いなことに、他人との表面上の類似点・相違点による戸惑いを越えると、自分の考え方・感じ方の特徴をより深く理解する瞬間が訪れる。この企画は、こうした瞬間を受け止める機会を私に少なからず与えてくれた。(元) 留学生との細やかな共感や相互触発が積み重なる中、私はより内省的に自分の経験を照り返すようになり、自分の新しい側面に心づくようになった。

信じてきた自己の独自性が崩れる経験を越えると更なる自己理解が深まる。それは、留学生に限らず、開発学にも共通するのではないか。他国と競争するために自国の開発経験の独自の価値を絞り出すのではなく、これまで語られることのなかったそれぞれの喜び、苦しみと迷いに反応しながら、自らの言葉を紡ごうとする営みこそが、開発学をより広い世界に向かって開

く方法であろう。留学生の声を浴びながら開かれた自分をもって、そう思った。

2. 日本の開発学を中国に伝える

開発学の語り方に自分の考えを持ち始め、本章の構想を練っていた時期に、ちょうどよく私に日本の開発学を語る機会が訪れた。

2023年8月、私は三年ぶりに中国に戻り、中国における国際開発の知識生産に関するフィールドワークを行った。インタビュー協力者の一人は、中国商務部国際発展合作研究所の所長であった。所長は日本に対して好意的なイメージを持つ親切な方である。インタビューの中で、中国の国際開発をめぐる知識の集約・保存や価値化に関するたくさんの取り組みについて何うことができた。そして、日本の状況について聞かれたり、それに答えたりしている中で、「日本の開発学について、講演をしてくれないか」と誘われた。

中国の開発学を博論で書いた私に、「副業」としてやってきた日本の開発学について発信が求められたのは思いがけないことであった。恐縮しながらも日中の理解を深められる良い機会だと思い、「私でよければ！」と引き受けた。

しかし、約2週間の準備期間の間は悩みが絶えなかった。日中関係が安全保障面で不穏になっているからだけではない。同じ時期に、福島第一原発の処理水の海洋放出が中国で物議を醸しており、日常生活の中でも両国の緊張感が高まっていたからである。日本の価値を無邪気に語ってしまうと、それが日本の「美化」と片付けられ、誤解と反発を引き起こすことを懸念していた。中国の参加者の受け止め方を想像しながら、私は「知識の脱（欧米）中心はいかに可能か：日本の開発学を例に」とテーマを据えた。中国が抱えている課題を主題とし、日本の試行錯誤をそれに応える一つの参照軸として位置付けた。

日本の開発学をその概念や実態の系譜から整理しながら、そこから脱中心化の方策を見出そうとする中、発表の形が見えてきた。当日、私は日本の開発学の中身がどのように戦後から今に至るまでの間に、増幅したり、縮んだり、方向性が変わったりしてきたのかを、研究と教育機関の変遷を踏まえて概説した¹¹。その中でも特に意味深いと思った側面—日本国内の地域づくりと国際開発の連動、日本の開発を変えようとしたその時々批判的な力、そ

してナショナリズムの高揚に抵抗するための研究者の存在—を中心に打ち出してみた。

他方、それが「日本の開発学」の正解だと思われることを避けるため、私は自らの開発や開発学というテーマに辿り着くまでの文脈を見せながら発表を進めた（汪 2023c）。というのも、「国」ではなく、「個人」という括りが持つ学術的意味に対する確信は、（元）留学生企画から得たものであり、それを中国の皆にも伝えたかったからである。

二時間半を予定していたイベントは大幅に延長した。中国の政府機関、研究者、NGO や学生など異なる職業や立場の参加者からの反応は多様であった。知識生産の仕組み、JASID の運営や対外援助体制に関する具体的な質問のほか、日本の開発学が持つ批判的視点、そして『『学問』とは何か、『開発』とは何か』をめぐる私の試行錯誤に対しても多くの共感が寄せられた。思いがけない驚きは、2008 年に起きた中国・四川大地震の時の被災者、日本救援チームの派遣を手配した元 JICA 職員と、現地で支援を調達していた国境なき医師団のスタッフがその場で繋がったことであった。

開発学の知識を生み出す時の悩みを隠さずに共有したからであろうか、講演を通して、私は想像もできなかった熱い関心と温もりに包まれて、日本の開発学を発信することがもたらす新しい広がりを見た。援助競争が激化する中、自らの居場所となっている国の価値を無批判に主張することはもはや出口にはならない。特定の国を中心に据えようとする欲望に打ち克つことこそが、広い聴衆との対話が生じる前提ではないかと考えるようになった。

VII. おわりに：探究を許容する場としての日本の開発学

本章はこれまで、漢方薬の勉強を目指して来日した私が日本の開発学の発信者になる過程をひもといた。多くの留学生と同じように、私もその時々での出会いや問題関心をきっかけに国際開発との絡み合いが深まり、今に至っている。

日本の開発学に取り組むようになったのは、国際開発における潮流、なかでも日中のプレゼンスの変容と無関係ではない。既述のように、私が日本の開発学について考える・書く・語る試みは、自国の国際開発が急激に拡大するなかで、それに関する日本の知見を見過ぎしたり、批判したり、また逆に

関心を示したりする中国人研究者に起因する刺激や触発によるところが大きい。このAEも、今日の日本が、地政学的な対立や援助競争に取り巻かれる中、自らの開発経験を偏狭な国益観で取捨することに対する危機感から生まれたものと言える。

私の例に限らず、日本の開発学に対する捉え方は、それに取り組む研究者自身を取り巻く環境と立場とともに変わってきたものであり、これからも変わっていくのであろう。日本の開発学が持つ意義への感じ取り方も当然のことながら不変ではない。教科書的な定見を決めつけることよりも重要なのは、日本の開発学が開発をめぐる知的営みを促したり阻んだりする場としての特徴を理解することではないだろうか。

来日してからの9年間において、私を一人の留学生から研究者へと育ててきた日本の開発学とは、「日本的要素を持つ開発経験への多角的な探究を許容する場」である。さらに言えば、それは参加者の国籍や来歴を問わず、その開発に対する素直な関心と疑問を受け入れる場である。この場が持つ意義は、研究の素材や知見を提示することだけではない。多様な矛盾や迷いを抱えている自分に出会わせる環境でもある。日本で開発というテーマに関わることで、私は言語、国家、人間のあり方を考える機会に恵まれるようになり、自分が歩きたい道も浮かび上がってきたのである。

こうした許容力は日本の開発学が持つ特徴に由来すると考える。一つ目は、教育・研究環境が体系化されていないものの、学びを深める緩やかな連携があることである。日本の開発学には決まったディシプリンやカリキュラムがなく、その輪郭は曖昧である。だからこそ、私のような研究経歴に一貫性のない者の参入も可能であった。ゼミや学会などの人的つながりが、異なる背景の参入者に開発の学びを深める機会を与えている。それによって、留学生のように偶然性・非体系性に翻弄されやすい存在であっても、指導教員をはじめとする属人的な絆を通して勉強・研究の足場を固めることができる。その反面、こうした足場をうまく得られなかった人が、不満、失望や批判を日本に向けて立ち去ることもありうる。

二つ目は、「欧米」と「非欧米」という二項のどちらにも当てはまらない日本の立ち位置である。端的に言えば、国際開発をめぐる知識生産の後発国である日本には、イギリスやアメリカのように、知的生産の権力側として、自己批判を含めて自己再生産するまでの強さがない。他方、中国のように、

侵略・抑圧された歴史から、欧米に対峙する価値観を立ち上げる「非欧米」の代表格にもなれない¹²。「欧米／非欧米」という構図において、日本はどちらにもすんなり帰属できない「第三項」といえる。このような日本の開発学では、自らの正統性を自明視することが難しく、それが逆に開発経験への多角的な探究を促しているのではないかと考える。

日本の開発学の許容力を生かし、それを活気に満ち溢れた場にするためには、自己正当化の知識生産ではなく、多様な主体による知識の共創こそが必要であろう。その第一歩は、開発学をめぐる知識生産の社会構築的な側面を前景化し、「国」という括りの自明性を揺るがすことにほかならない。「日本の開発学」における日本の含意を「日本人」という排他的な国籍資格に限定せず、「日本語」や「日本における」などの領域にも延伸させれば、異なる出自の語り手が日本の開発学に引き寄せられ、その議論にさらなる活力をもたらすことが可能になる。

本AEは、私が「第三項」として日本の開発学を語り出す一例にすぎない。より多くの語り手の参加を支えるには、個人的な違和感として片付けられがちな問題意識を安心して共有できる環境を積極的に築く工夫が求められる¹³。この工夫の先に、日本の開発学が、「脱欧米中心」の議論にとっても、そしてそこに関わる一人一人の語り手にとっても、潤沢で愛しい土壌になることを、「第三項」同士である私は期待している。

注記

¹ 具体的には、欧米起源の開発概念・規範、学術的出版における「英語」の優位性、人材育成と研究規範に対する欧米の大学や研究機関の支配的地位を相対化することを指す（汪 2023b）。

² 関連する論考に、Kim et al. (2023)、汪 (2022)、汪 (2023b) などがある。欧米中心の概念、アジェンダ、人材育成システム、学術規範が、非欧米社会に深遠な影響を与え続けてきた中、欧米を「絶対的他者」化して自らの独自性を論じることは不可能である。この限界は非欧米社会全体の知識生産にも当てはまる。

³ エリスらが指摘したように、「ほとんどの書き手は、一人称で書くことを選ぶことさえできない。自分の操る支配的規範に見合った学問的表現によって、自縄自縛の目になっている。そして、いったん、匿名的表現が規範となると、一個人として自己を語るような物語は、逸脱した表現とされてしまう」のである（エリス・ボクナー 2006: 131）。

- ⁴ 開発学の研究においても、こうしたポストモダンの議論による影響が見受けられる。主体のあり方に絡みながら、言説分析やポスト開発論が盛んになったのは1980年代に入ってからである。
- ⁵ 例えば、Jones et al. (2013), アダムスら (2022), エリス・ボクナー (2006) などがある。
- ⁶ 本章を書くことをきっかけに、私の記憶に眠っていたかつての経験が重要な瞬間として喚起されたり、位置付け直されたりしている。そういう意味では、エピソードは追認的だと言える。
- ⁷ 2016年度の出願書類をみると、その題名は「威寧石門坎における苗族の宗教変容と文化実践：少数民族地域の「文化復興」という今日的な視点から」となっている。修士二年間の勉強・研究を経て視点の変化があるものの、観光開発という着眼点は一貫していた。修士の研究成果は、汪 (2018), 汪 (2019a) にまとめられている。
- ⁸ 2017年11月に提出した出願書類では、研究計画の題名は、「異なる開発援助観のせめぎ合い：中国の最貧省における世界銀行の貧困削減プロジェクトから」となっている。その調査結果の一部は、汪 (2021a) にまとめられている。
- ⁹ 「開発」概念の研究成果の詳細は、汪 (2020) を参照。
- ¹⁰ その研究成果は、汪 (2021b) を参照。
- ¹¹ ここでは、Sumner の分類を用いた。Sumner は、第二次世界大戦後から今日に至るまでの開発学の蓄積を、先進国・途上国という二項対立を前提とする「援助研究」、環境や教育などの具体的なセクターの課題を取り扱う「グローバル開発研究」、脱植民地主義・脱構築主義を取り入れている「批判的開発研究」と、国家の変革関わる経済的・経済的な問題を取り扱う「古典的開発研究」という4つの類型にまとめている (Sumner 2022)。
- ¹² 日本の開発学が持つ立場性 (positionality) をめぐるこの考察は、キム・ソヤン氏 (本特集号・第5章の執筆者) の2023年論文 (Kim 2023) およびキム氏と著者の共同執筆 (Kim and Wang forthcoming) を通して明確になったものでもある。それらの論考を通して、脱植民地論が東アジアの開発学に重要視されてこなかった現状が明らかになった。さらに、開発協力における日本の曖昧な立場性が、近代における植民/被植民の歴史や戦後の海外進出に伴う自己認識から分析された。
- ¹³ AE という方法論を用いて、個人として断片的な感触を繋ぎ合わせ、他者に晒すリスクを負うまでに自分を前景化するに踏み出すことは簡単ではない。既述のように、私も自らの経験が持つ価値を言葉にできるまで、周りの人びとによる支え、励ましと触発が必要であった。

参考文献

- アダムス, トニー・E, ジョーンズ, ステイシー・ホルマン, エリス, キャロリン (松澤和正訳・佐藤美訳), 2022, 『オートエスノグラフィー—質的研究を再考し, 表現するための実践ガイド』新曜社.
- エリス, キャロリン, ボクナー, アーサー (平山満義監訳), 2006, 「第5章自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性—研究対象としての研究者」, 大谷尚・伊藤勇・N. K. デンジン・Y.S. リンカン編, 『質的研究ハンドブック3巻, 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房.
- 汪牧耘, 2018, 「中国・石門坎の観光資源化—異なるアクターの働きかけと『価値の浮沈』」法政大学大学院国際文化研究科 修士学位論文.
- , 2019a, 「中国・石門坎の観光資源化プロセス—政府と諸アクターの相互作用に着目して」『白山人類学』第22号, 131-151頁.
- , 2019b, 「日本で開発を学ぶ若手たち—国々の同床異夢から異床同夢へ」宮川慎・汪牧耘・綿貫竜史・田中志保・長谷川美波・小林誉明「開発に携わる若手コミュニティの構築」2019年11月16日・国際開発学会.
- , 2020, 「『開発=开发(カイファー)』の意味変容と概念形成—一日中における言葉の借用を中心として」『国際開発研究』第29巻, 第1号, 89-99頁.
- , 2021a, 「『生き物』としての国際協力—中国貴州省にみる世界銀行と開発事業の現地化」松本悟・佐藤仁編『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社, 259-283頁.
- , 2022, 「中国開発学序説—非西洋社会における学知の特徴と可能性」東京大学大学院新領域創成科学研究科 博士学位論文.
- , 2023a, 「日本で国際開発を学ぶ—『内なるよそ者』が見るその現状と意義」『国際開発ジャーナル』第798号, 30-31頁.
- , 2023b, 「中国における国際開発研究の受容と展開—脱『欧米中心主義』の可能性の一考察」『アジア経済』第64巻, 第3号, 31-60頁.
- 川口幸大, 2019, 「東北の関西人—自己／他者認識についてのオートエスノグラフィ」『文化人類学』第84巻, 第2号, 153-171頁.
- , 2022, 「オートエスノグラフィをオートエスノグラフィする『東北の関西人』がもたらしたもの」京都市人類学研究会 (2022年10月28日, オンライン).
- 多和田葉子, 2012, 『エクソフォニー—母語の外へ出る旅』岩波書店.
- 土元哲平・サトウタツヤ, 2022, 「オートエスノグラフィーの方法論とその類型化」『対人援助学研究』第12巻, 72-89頁.

藤田結子・北村文編, 2013. 『ワードマップ現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社.

汪牧耘, 2021b, 「日本国際発展知識体系の建構—従伝統到前沿の歴史演變」『日本研究』第 3 号, 47–57 頁.

———, 2023c, 「知識的“去（欧美）中心化”何以可能: 以日本の国際発展研究為例」中国商務部・国際発展合作研究所・青年智匯 003 | 調研与思享系列, 8 月 19 日, <https://mp.weixin.qq.com/s/0bPd45sZqVxkM16JW4Rk9A> (最終アクセス 2023 年 9 月 20 日).

Adams, T. E., Jones, S. H., and Ellis C. 2015. *Autoethnography: Understanding Qualitative Research*. New York: Oxford University Press.

Cheng, H. and Liu, W. 2021. “Disciplinary Geopolitics and the Rise of International Development Studies in China,” *Political Geography*, 89, 102452.

Chi, Y. and Van Orden, J. 2023. “Asia as a Producer of Knowledge,” *The Oxford Handbook of Higher Education in the Asia-Pacific Region*, Chapter 22, pp. 464–499.

Eribon, D. 2013. *Returning to Reims*. Los Angeles : MIT Press.

Falola, T. 2022. *Decolonizing African Knowledge : Autoethnography and African Epistemologies*. Cambridge University Press.

Jones, S.H., Adams, T.E., and Eills, C. 2013. *Handbook of Autoethnography*. Left Coast Press.

Kim, S. 2023. “Making a Case for Postcolonial Thinking in International Development Studies: Towards a More Critical and Self-reflexive Field,” *Journal of International Development Studies*, Vol. 31, No. 3, pp. 83–103.

Kim, S. and Wang, M. Forthcoming. “Conclusion: Imagining Pluriversal Development Knowledge Production via Japan as Method,” *The Semantics of Development in Asia: Exploring ‘Untranslatable’ Ideas Through Japan*, Springer Nature.

Kim, S., Wang, M. and Sato, J. 2023. “Development Knowledge in the Making: The Case of Japan, South Korea and China,” *Progress in Development Studies*, Vol. 23, No. 3, pp. 275–293.

Stahlke Wall, S. 2016. “Toward a Moderate Autoethnography,” *International Journal of Qualitative Methods*, Vol. 15, Issue 1, 1609406916674966.

Sumner, A. 2022. “What is Development Studies?”

https://www.eadi.org/fileadmin/user_upload/EADI/03_Publications/EADI_Policy_Paper/What_is_Development_Studies.pdf (最終アクセス 2023 年 9 月 20 日).